

# 神奈川県称名寺板絵著色弥勒来迎図・板絵著色 弥勒浄土図（金堂来迎壁）彩色保存処置

受託研究報告 第 23 号

茂 木 曙・立 田 三 朗



図一 表側弥勒来迎図 中央に厨子が作られ（江戸時代）柱のために絵が三分されている  
（米田太郎氏撮影昭和30年？）

## 1. はじめに

称名寺は、神奈川県横浜市金沢区にあり、北条実時（1224～1276）ゆかりの寺である。関東に於ける鎌倉時代草創の名刹として特筆さるべきものであろう。だが今日では当時の建造物はない。天和元年（1681）に再建といわれる現在の金堂内に残る板絵については、本尊木造弥勒菩薩立像（重文）と共に草創当時のものとされ、板壁の表と裏に、弥勒来迎図、弥勒浄土図が描かれてあり、昭和30年2月2日、国指定の重要文化財になった。板絵は草創伽藍から再建金堂へと引つがれたもので、時代の経過と共に剝離剝落が甚だしく、保存のため当保存科学部の昭和44年度受託研究として、化学研究室（岩崎友吉室長、樋口清治技官）の協力を得て、修理技術研究室（立田三朗室長、中里寿克技官、茂木曙技官）が主に担当して保存処置を行なった。板壁の構造解明には物理研究室（登石健三室長、石川陸郎技官）がX線撮影を行なった。



図—2 裏側 弥勒浄土図（米田太郎氏撮影昭和30年？）

尚称名寺長老小林憲住師，金沢文庫の前田元重学芸員始め職員の方々の便宜を得た。

## 2. 処置前の観察

表側弥勒来迎図に対しては，昭和30年の冬に，合成樹脂による剝落ため処置が行なわれている。即ち，当時文化財保護委員会美術工芸課立田三郎技官と，東京国立文化財研究所保存科学部茂木曙技術員が実施したものである。本尊の弥勒菩薩像が中央の厨子から搬出された機会に，P.V.A3%溶液を使用して行なった。つまり来迎図については，実施不可能な厨子の後柱2本の陰の部分を除いて処置済であった。今回，10数年後の経年変化調査を行ない得て，裏面



図—3 裏側弥勒浄土図部分 処置前

浄土図の保存処置の参考にすることができた。来迎図の総点検を行なった結果，効果は充分で，極一部の顔料自体と，矧目の木屎や地粉などの厚手の層に少々浮上りを認めた程度であった。板壁の構造は約30cm幅の桧板を縦に9枚半並べて，高さ244cm，横317cmの大壁画を構成し，朱塗りの額縁が廻らされている。浮土図に向かって右端の板は，幅が10cm程度しかなく，図様から見ても，当初は全体にまだ幅が広く，天和年間の改築の際に，柱間に合わせて削ってしまったものと思われる。板の厚さは約2cm程で，壁面は一見して平滑ではあるがよく

観察すると、やりがんなで仕上げたと思われる凹凸がある。板の矧目は相欠きとしてあり、部分的に雇柄を入れて板を繋いでいる。彩色は、本格的な漆下地の上に描かれたもので、木屎、布着せ、地粉下地、塗漆の工程がよくわかった。すなわち、板の矧目は木屎彫とし、木屎がつめられている。この部分の木屎層は厚く、木片状に浮上っているところが、かなり見受けられた。木屎の上に矧目に添って布着せが行なわれている。布自体は、木屎や地粉に比較的よく接着しているが、木屎もろとも剝離したり、矧目では殆んど切れていた。なお、布着せは矧目ばかりではなく、板の中央にも欠損部などに貼られており、浄土図左上方には、かなり大きな布が認められた。又板壁全体に赤地色の地粉が約1mm~2mm程の厚さに塗られていた。この地粉は細かな砂状を呈し、その上に施されている薄い塗漆は殆んど老化して、地粉下地層もろとも脆弱化し、ここから剝離落している場合が非常に多い。彩絵は塗漆の上に薄く白土を下塗りしてから描かれている。

剝離剝落の現状を大別すると二つに別けられる。

一つは地粉層が板の素地からの浮上りで延面積にすれば、最も広く且つ危険な状態であった。この地粉層には、細かな網目の断文が入っている場合が多い。地粉層は剝落部分との境目の木の素地との間が大きく浮いていることが多い。地粉層に生じた断文がそのまま塗り漆及び彩色層まで及んで鱗片状に彩色を剝落させているところもかなりあった。(図-4)

もう一つの剝がれの原因は、顔料自体が下地から浮上っている状態で、小面積に点在する程度であった。

### 3. 保存処置

前述のように昭和30年に保存処置が済んでいる来迎図の点検結果から、浄土図に使用する合成樹脂も先づP.V.A溶液を主に行なうことに決定した。P.V.Aは文化財の保存処置に使われている合成樹脂としては、歴史も古く、扱いに慣れ、又、この壁画の剝離の大部分を占める地粉層の砂状の特質にはよく含滲するので再び採用したものである。但し、浄土図の方が来迎図よりも地粉層がやや厚手なので、濃度を従来 $2\% \sim 3\%$ から、少々変更した。

先づ、筆、刷毛などを用いて画面上のほこりを丹念に除き、P.V.A 4%溶液を注射器、筆先によって布着せや、地粉下地の浮上り内部に十分に注入した。彩色部の剝離や断文などには3%~4%溶液を、滲透状態に応じて含滲させたのち、2%の溶液を軽く吹きつけて濾紙を当て圧着させた(図5)。顔料層だけの剝離には、2%~3%程度の溶液の含滲圧着で充分接着した。乾燥後の点検を行なって、接着力の不足部分には再度補強をした。なお表裏とも木屎の浮上りや、P.V.Aで接着し難い布着せなどには、ペースト状のアクリ



図-4 表側弥勒来迎図  
童子の顔の部分の断文



図-5 裏側弥勒浄土図部分 処置後

ル変性醋酸ビニール系エマルジョン樹脂を使用した。

### 4. X線透視

須弥壇に向って右側の小壁について透視による構造調査を行った。撮影場所及び結果は図-6と図-7に示したが、その限りに於ては板の継ぎ目は相欠きとなっており、布着せは両面に施されているが釘の使用は全くない。壁面のところどころに布着

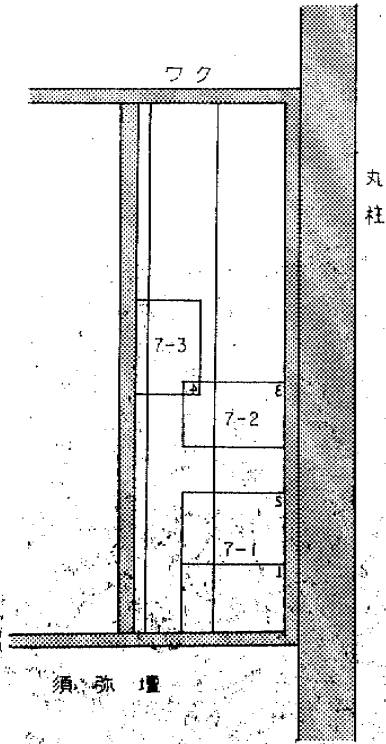


図-6 X線透視撮影箇所



図-7-1 X線写真



図-7-3

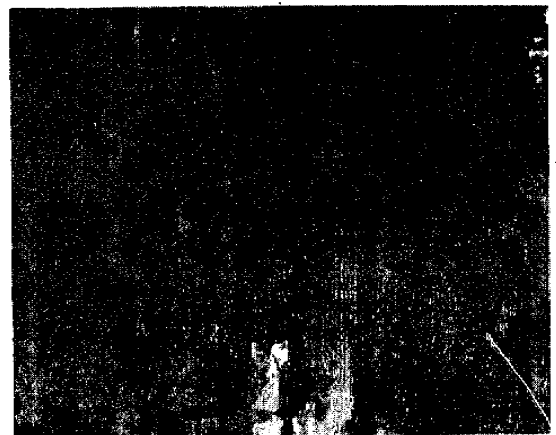


図-7-2

せが肉眼でも認められるが、それが全面に張られているものではなく、透視の結果でも、ごく部分的でそれも不規則な貼り方がなされてありそれは図-8に示してある。継ぎ目に布着せをするのが、一般的と考えられるが、この壁面には継ぎ目以外のところにも布着せが認められた。このことは、過去に於て修理の手が加わっていないとすれば、材質的にそうせざるを得ない欠陥があったものと考えられる。

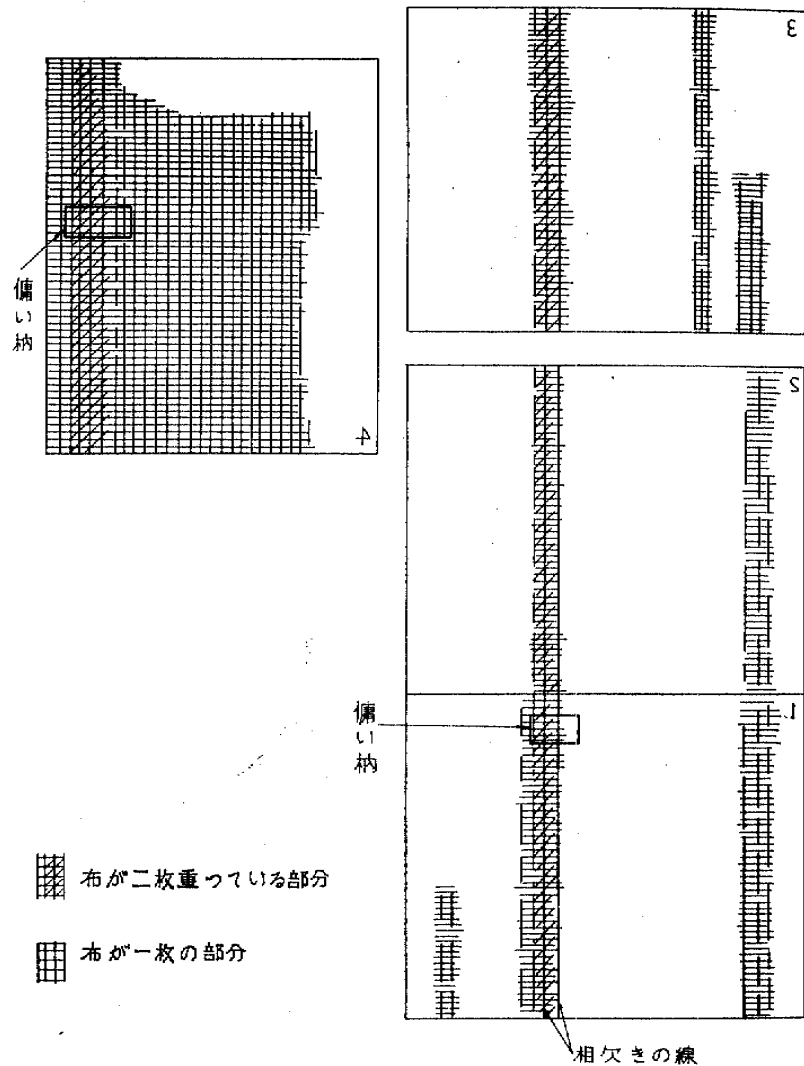


図-8

## Résumé

Akita MOGI and Saburō TATSUTA:

Preservative Treatment of the Painting on Wood Wall Behind the Principal Statue in the Main Hall, Shōmyō-ji Temple

The paintings on the obverse and reverse sides of the wooden wall under discussion were done in the early 13th century. The obverse side shows the Descent of Maitreya, and the reverse side shows the Pure Land of Maitreya. Treatment for preventing exfoliation of coloring on the obverse side was done some years ago. The result was satisfactory and was quite helpful in our present treatment on the reverse.

The exfoliation and floating of the coloring of the coloring had occurred mostly between the mood base and the priming of a mixture of raw lacuer and pulverized

claystone. We used 2-4% solution of P. V. A., for the priming was thick, sand-like and very absorbent. P. V. A. had been used also in the previous treatment on the obverse side, but this time we adopted different concentration and method. The parts covered with cloth under the priming, and parts where the coat of a mixture of sawdust and raw lacquer had floated from the base, were secured with paste-form vinyl acetate emulsion with acrylic resin. We also took X-ray photographs for the purpose of examining the construction of the wood wall and the state of cloth covering.